



誠信書房
A5判
本体 2,500円

小林隆児 〔著〕

臨床家の感性を磨く —— 関係をみるといこと

いわゆる学術書で、これほど心揺さぶられ、胸が熱くなることはなかった。

精神科医である著者が、そもそも心とは何か、心の治療とは何かを自らの臨床実践から語る。そして、心の治療に欠かせないものが人と人との関係をみる、心の動きを感じ取る感性であるとする。その感性を磨くにはどうしたら良いのだろうか。大学教員でもある著者が、まさに心を感じ取ることを生業とする対人援助職をめざす大学生、大学院生に対する、感性を磨く教育実践を詳らかに表す。

学生たちは少人数のグループで乳幼児期の親子の関わりを録画した映像を観る。映像に登場する親子は、自閉症スペクトラムをはじめ、何らかの関係の難しさを抱えている。親子の心の動きを捉え、自由に感想を出し合い、議論していく。ある学生は他の学生からどう思われ

るかに気をとられ、意見が定まらない。ある学生はことさらに専門的な知識を用いて心の動きを捉えようとする。ある学生は子どもの姿に自分を重ね、激しく動揺し、何も言えなくなる。他人事ではない。誰しも身に覚えがあると思う。心の動きを感じ取るということが決してたやすいことではないことに気づかされる。

その難しさに向き合う、それぞれの姿もまた描かれる。学生たちは親子についての議論を通して、自らに湧き起こるさまざまな思いを必死に感じ取り、表現しようともがく。自らの育ちや生き様に目を向けざるを得なくなる。これまでやり過ごしてきたさまざまな思いにさらされ、その思いを、自らの親子関係を見つめ、語り、難しさの向こう側に辿りついていく。痛みや苦みを伴う。しんどさが伝わってくる。その姿はとて率直かつ

誠実であり、己の身を、心を重ねて読まざるを得ない。

改めて考えさせられる。私たちが相手の気持ちをを感じ取ることができているのはなぜだろうか。あるいは、感じ取っていると思うことができているのはなぜだろうか。本書には具体的な感性を磨く術が示されているわけではない。著者の手によって現される、臨床家を目指す者たちの、感じ取ることをめぐってもがき、葛藤する姿に触れ、どんな思いを抱くか。読者である、私たち自身の感性が問われているのだと思う。

最後にもうひとつだけ。感性を磨くこととはしんどさを伴うことである。けれども、そのことによって心は自由に、関わりはより豊かになっていく。本書は、あらゆる人々にも向けてそう語りかけていると思う。